

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

北海道大学

前期日程

科目

地理

総括

試験時間	90分	難易度（昨年比）	難化	昨年並	易化
満点（配点）	150点	分量（昨年比）	増加	昨年並	減少

<総論>

例年通り大問4題構成で、それぞれ5～6問の小問からなる点は踏襲された。しかし、論述問題は昨年の11問から15問へと増加し、論述の総行数も31行から46行へと大幅に拡大した。

選択式・記述式の分量はわずかに減少したものの、全体として解答負担は確実に増し、時間配分の難しさが昨年以上に際立つ構成となった。扱われているテーマや資料は例年通り標準的で、知識面で特別高度な内容が問われているわけではない。ただし、論述量の増加により、限られた時間内で要点を整理し記述する力がより強く求められるようになった点で、昨年より難度が上昇したといえる。

<特記事項・トピックス>

（特記事項）

昨年は大問4題中3題が地誌であったのに対し、今年は3題が系統地理で構成され、系統分野の比重が高まった。第1問で「地震・津波と防災」が大問テーマとして扱われたのは初めてで、新課程を踏まえた出題である。2024年入試まで頻出であった地形図読図は2025年度には出題がなかったが、今年は2枚の地形図が再び使用された。ただし内容は比較的平易で、従来の高度な読図力は求められなかった。また、第4問の間3のジェントリフィケーションに関する論述は、本校北大模試（第1問の間1の解説）で扱った内容と一致しており、模試の復習内容がそのまま答案作成に生かされる形となった。

<合格への学習対策>

北大では図表や統計を根拠に理由を説明する力が問われる。今年は論述量が大きく増えたため、30～120字の答案を繰り返し書く練習が不可欠である。また、統計集を使って資料読解に慣れ、基本語句を因果関係で説明できるようにしておきたい。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	分野・テーマ（表題）	特徴（内容分析・解答上のポイント）	問題レベル
1	選択式 記述式 論述式 2行×1 4行×1 5行×1	地震・津波と防災	問2は、問3・問4と内容が重複しないように、液状化や津波以外の理由で建物被害の発生しやすさを説明する必要がある。問4はハザードマップの役割に着目し、浸水範囲や避難経路・避難場所を事前に把握できることが、防災上の有効性につながる点を論理的に整理する。問5は、新旧地形図から、旧町役場が津波被害を受けやすい低地にあったのに対し、新しい町役場は高台へ移転した点を読み取る。高台への移転と道路整備により避難が容易になり、町役場が災害時の支援拠点として機能を維持できることを説明するとよい。	やや難
2	選択式 記述式 論述式 3行×1 4行×2 5行×1	食料と農業	問2はケニアの高原の温暖な気候を踏まえ、紅茶のプランテーションと、切り花・野菜・果実など輸送園芸の輸出向け生産が発達している点を説明する。問4はケニアの高原気候を踏まえ、紅茶・切り花を中心とした輸送園芸が輸出向けに発達している点を簡潔にまとめたい。問5は日本の端境期（年次前半）に国外産の割合が増える一方、後半は国内産が中心となる構造を押さえる。問6では冬季の気候差を根拠に、太平洋側は日射を利用できるため太陽光型、日本海側は冬季に日照が少なく、大都市圏では用地確保も難しいため人工光型となる理由を説明する。	やや難

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

3	選択式 記述式 論述式 3行×3	地球環境問題	問2は、公害は加害者・被害者を特定しやすい局地的被害であるのに対し、地球環境問題は特定が難しく被害も地球規模に及ぶ点を整理して説明する。問5は、京都議定書は先進国のみが削減義務を負うのに対し、パリ協定は世界全体が自主的に削減に取り組む 点の違いを述べる。	標準
4	選択式 記述式 論述式 1行×1 2行×2 5行×1	イギリス	問3は、再開発に伴うジェントリフィケーションとして、家賃・物価の上昇による元住民の転出と、コミュニティ崩壊などのデメリットを述べる。問4はFTAが物品貿易中心であるのに対し、EPAはサービス・投資・人の移動など幅広い分野を含む包括的な協定である点を簡潔に説明する。問5はEU拡大を背景に、移民流入が社会保障費の増加を通じて国家の財政負担を高め、不満が生じる因果関係を述べる。指定語「財政負担」「保険・医療制度」を用いて論理的にまとめる。	標準

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。